

# 産炭地区における宗教コミュニティの形成

## ——長崎県北松地区への移住と平戸口小教区の形成——

叶堂隆三

### はじめに

明治以降の長崎の半島・離島出身のカトリック信徒の移動の特徴は、農業地域をめざす農業志向性と同郷の家族・世帯による集合的移住である。もともと明治後期・大正期になると、都市や山間の産炭地をめざす非農業志向の移動が見られる。

現代社会の特徴の一つは高い移動性である。地理的移動の場合、向都現象—すなわち農山村から都市地域への人の移動—が一般的事象で、第1次産業と第2次・第3次産業の産業間格差や都鄙間の生活格差を要因とし、移動に適した形態は核家族あるいは単身の移動という特徴をもつ。

そのため、農業志向の長崎のカトリック信徒の移動は、傍流に位置づけられる。しかし明治後期に生じる産炭地域への移動との比較から、農業地域や産炭地域への移住を要因づける出身集落の社会的状況や宗教志向性の変容、とりわけ類縁関係の及ぼす影響が明らかになる。本稿では、農業地区への移住と山間の産炭地区への移住が同時に生じた長崎県の北松地区の平戸口小教区を事例にして、農業地区・産炭地区への移住と移住地における宗教共同体形成の社会的特徴を明らかにする。

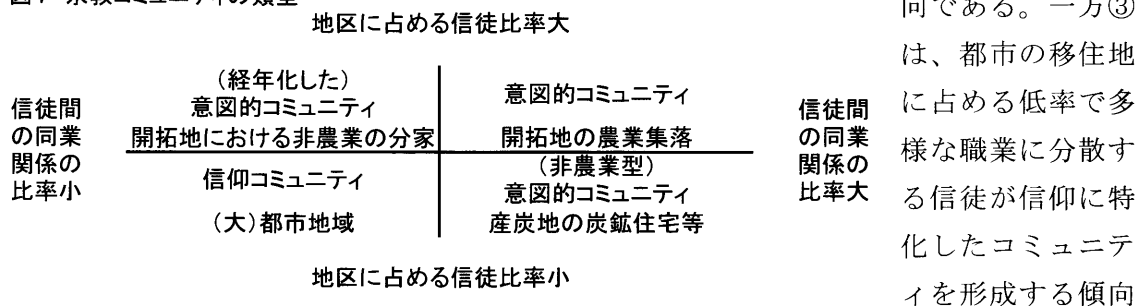
### 1 農業地区への移住と鉱工業地区への移住

長崎県の半島・離島出身のカトリック信徒の移住の特徴は、移住地から次の移住が生じる移住の連鎖（循環）と農業志向性である。さらに連鎖（循環）しつつも同郷関係と世帯を単位にする移動形態が継続し、とりわけ開拓地への入植が多く見られた。こうした傾向は、意図的コミュニティに生まれ育った信徒が意図的コミュニティの再生・形成をめざす志向性の影響と推定できる。

しかし、日本の近代化・産業化の展開とともに長崎県の信徒の間にも非農業志向の移動が生じる。北松・平戸地区の場合、明治中期の海軍鎮守府の開府以来、軍事都市・工業都市として急激に発展した佐世保市への移住が、非農業志向の移動の大きな流れである。こうした非農業志向の傾向には、さらに北松地区の山間の産炭地域への移住を加えることができる。

北松地区の移住地に形成された宗教共同体は、地区（集落）における2つの類縁関係性—宗教関係（信徒）と信徒間の同業関係—の比率によって、図1の①意図的コミュニティ・②（非農業型）意図的コミュニティ・③信仰コミュニティ・④（経年化した）意図的コミュニティの4類型のいずれかに区分できよう（叶堂 2014 a: 13）。そのうち①は、移住地で農業従事をめざす世帯が職業と信仰をとにもする意図的コミュニティの再生を志向する傾

図1 宗教コミュニティの類型



向である。一方③は、都市の移住地に占める低率で多様な職業に分散する信徒が信仰に特化したコミュニティを形成する傾向である。また④は①の地区（集落）の郊外化等によって非農業の世帯が生じたり、非信徒の居住が進む状況である。

これまで検証を進めてきた農業地域・都市地域への移住に対して、山間の産炭地域の宗教共同体は③に位置づけられると仮定されるものの、移動の背景や移住後の信徒の状況、教会設立の経緯は十分に把握していない。産炭地域への移住が、生まれ育った意図的コミュニティからの離脱を志向するものか、あるいは農業地域（時として都市地域）への移動と同様に宗教コミュニティの形成を志向するものかも不明である。とはいえ、明治後期から多く見られるようになった産炭地域への移住の検証は、長崎のカトリック信徒の移動における社会関係性—とりわけ類縁関係性—の発動状況の把握に不可欠の作業である。

本稿は、平戸市田平地区北部・佐世保市西部の一部を管轄する平戸口小教区を事例にする。現在の平戸口小教区の管轄のうち農業地区にかつて集落教会の岳崎教会・永久保教会が形成され、第二次世界大戦後、中心地区（山内免）に平戸口教会が設立される。一方、産炭地区には炭鉱教会の潜竜教会・江迎教会が形成され、平戸口小教区の誕生後に巡回教会に位置づけられる。

本稿の目的は、平戸口小教区を事例にして次の3点を解明することである。

第1は、明治後期から人口流入が始まる平戸口小教区管轄の農業地区（および中心地区）と旧産炭地区の来住・居住世帯の比較から、農業および炭鉱労働を志向した家族と移動の社会的特徴を明らかにすることである。

第2は、農業地区（および中心地区）と旧産炭地の信徒世帯の宗教生活に関して、その差異と共通点を把握することである。

第3は、これまでに検証を進めてきた農業地域・都市地域への移動と比較することで、産炭地域への移住の特徴を明らかにし、その類型化を図ることである。

以上の目的に沿って、第2節で、まず第2の目的に関して平戸口小教区に所属する各教会の設立を概略する。次に第1の目的に関して、初期の平戸口小教区の信徒台帳の記録を利用して、第3節で農業・中心地区および産炭地区の信徒世帯の状況、第4節で農業・中心地区および産炭地区における移動状況を明らかにする。最後に第5節で、第3の目的に関して、産炭地域への移住の社会的特徴を検討し、産炭地域の宗教共同体の類型化をめざす。

## 2 平戸口小教区の各教会の形成

まず、平戸口小教区の平戸口教会・潜竜教会・江迎教会の設立の状況を概略する。なお、巡回教会の江迎教会は、2015年に廃堂になっている<sup>1)</sup>。

### 平戸口教会

平戸市田平地区は北松浦半島の西端に位置し、その多くは丘陵地帯である。昭和期の町村合併促進法で田平町が成立し、2005年に平戸市に編入される。旧田平町の人口は2014年現在、人口7,076人、世帯数3,034世帯である。この旧田平町のうち国道204号線の北側の野田(野田免)・平戸口(山内免)・永久保(大久保免)・岳崎(岳崎免・里免)が平戸口教会の管轄である<sup>2)</sup>。明治中期の田平地区へのカトリック信徒の移住は、佐世保市黒島地区および長崎市外海地区(出津)の外国人司祭(黒島教会のラゲ神父・出津教会のド・ロ神父)の主導である。その後、旧田平地区への移住が続き、南田平教会(現在の田平教会)の周辺からしだいに移住地が拡大する。

この時期の(南)田平教会の管轄は、田平地区と北松地区の産炭地を含む広大なものである。1952(昭和27)年の平戸口小教区の独立後、田平地区のうち国道204号線の南側が平戸口教会の管轄になる。

現在の平戸口教会の管轄の野田地区・永久保地区・岳崎地区の昭和初期の世帯数は、永久保・野田地区10世帯(平戸出身4世帯・黒島出身3世帯・外海出身2世帯・五島出身1世帯)、岳崎地区9世帯(五島出身9世帯)の合計19世帯である。第2次世界大戦後に3地区の信徒世帯数は、山内地区等を含めて約70世帯に増加し、2002年には124世帯に達する。その内訳を推計すれば、昭和初期に居住していた家族16家族(35世帯)、田平地区(小教区)の家族の分家7家族(13世帯)、大正末期・昭和初期以降に移住した家族48家族(76世帯)である。こうした世帯の増加は、移住の経年化によって田平地区(田平)への居住が飽和に達し、その周辺地区の野田・永久保・岳崎・山内地区が新来住世帯の受け皿になったこと、周辺地区に居住する家族に分家が創出されたこと、さらに田平地区(田平)の家族の分家が周辺地区に創出されたためと推測される。

1940(昭和15)年、岳崎地区・永久保地区に巡回教会が設立される(永久保教会は1945年に焼失)。第二次世界大戦後、中心地区の山内免に設立された平戸口社会館に引退した邦人司祭がその二階でミサをあげるようになり、(南)田平教会から遠距離の永久保・岳崎の信徒が参集する(長谷 2002: 28-31)。邦人司祭の転出後、ミサを担当した外国人司祭が離任時に聖堂建設のための資金30万円を寄付し、信徒の間に教会建設の機運が生じる。邦人司祭が社会館横に購入していた土地を敷地として永久保・岳崎の信徒が労働奉仕をして、1952(昭和27)年に平戸口教会が完成し、平戸口教会は小教区として独立する。司祭館を含めた総工費は370万円である(浜崎 1975: 151)。

### 潜竜教会

潜竜教会と江迎教会(2015年に廃堂)の立地する旧江迎町は、2010年、佐世保市の一部に編入合併する。旧江迎町は北松浦半島中央の谷あいから江迎湾に延びる町域で、1889(明

治 22) 年に内陸の旧猪調村と海側の長坂村の合併で江迎村が誕生する。町政を敷く前の 1920 年の第 1 回国勢調査の人口は 4,706 人で、大正・昭和初期の炭鉱の開坑によって人口が急増する。とりわけ 1933 年の住友鉱業の潜竜鉱山、1934 年の日室江迎鉱業所の開坑で大規模な人口流入が生じ、1939 年に人口は 1 万人を超える。大規模な炭鉱が立地した猪調地区には、1955 年の旧江迎町の人口の約 18,000 人のうち 11,000 人が居住する（江迎町教育委員会 1968: 461、江迎町郷土誌編纂委員会 2000: 156）。また猪調地区に隣接する旧吉井町（2005 年に佐世保市に編入合併）に日鉄北松炭鉱御橋鉱・福井炭鉱が開坑し、さらに佐々町皆瀬で神田炭鉱が操業する（吉井町郷土誌編纂委員会 1966: 139-149）。

潜竜教会は、旧江迎町の猪調地区に所在し、旧吉井町と旧江迎町の志戸氏免・猪調免・田ノ元免等が管轄である。潜竜地区の炭鉱で就労する労働力にカトリック信徒が含まれ、住友鉱業の炭住がまず教会堂（民家御堂）として使用され、1953（昭和 27）年に潜竜教会が建設される（江迎町郷土誌編纂委員会 2000: 713）。一時期は小教区として独立するほどの信徒数であったものの、相次ぐ炭鉱の閉山による信徒減少のために 1970 年に平戸口教会の巡回教会に位置づけられる。『よきおとずれ』（2012 年 4 月号）によれば、現在の教会は 2008 年に新築され、イエスのカリタス修道女会の運営する幼稚園が隣接する。

#### 江迎教会

江迎教会は、佐世保市江迎地区の長坂免に所在した。『北松浦郡江迎村郷土誌』（1928: 87）に「明治 22 年岩崎方吉なるもの本郡黒島村より根引の一隅に移住と共に伝来せる」とある。また『よきおとずれ』（2012 年 4 月号）の江迎教会の信徒によれば、「わたしたちの先祖は 1897 年（明治 30）ごろ黒島から町内の根引地区に移住してきた」という。

しかし、岩崎という姓は現在の黒島の信徒名の中に見当たらない。その一方、黒島・外海から移住が始まる前の明治初期の田平地区に岩崎姓の信徒がいたという。『瀬戸の十字架』によれば、岩崎は「もとは薩摩藩士であったが、廃藩で禄を失った。その後、……流れ流れて瀬戸の浜に来た。そこで農業をする……。その後……追放され」という（浜崎 1975: 12）。この時、岩崎家以外にも前田家・西村家・鴨川家が追放され、「前田、西村、岩崎諸氏は紐差方面に、鴨川氏は黒島に追放された。紐差神鳥で数年前亡くなった前田七太郎氏、江迎町東江迎の前田新一郎氏、江迎町根引から長崎に移っている小川留潮氏などは、前田貞次郎氏の子孫」（浜崎 1975: 13）という。現地調査に基づく浜崎の記述から、前田家（小川氏は前田家の養子）・岩崎家の中から江迎町根引に開拓移住があったと推測される。この推測を補強するものとして、田平地区（田平）に移住した小川音作氏が他家族とともにさらに江迎に移住したという記載もある（浜崎 1975: 15、23）。

昭和初期の信徒数は 12 世帯 110 名で、遠距離の（南）田平教会のミサに通っている（北松浦郡江迎村郷土誌 1928: 87）。その後、主教会が西木場教会・潜竜教会・平戸口教会に移行し、1977 年に教会が設立される。『よきおとずれ』（2012 年 4 月号）によれば、この時の信徒世帯数は 30 世帯である。

### 3 平戸小教区の信徒世帯の家族状況

平戸小教区の農業・中心地区への移住世帯と産炭地区への移住世帯の比較から、農業や炭鉱をめざした世帯の家族と移動の状況が明らかになる。本節では、平戸小教区の独立時から北松地区の炭鉱が廃校となる 1960 年代～1970 年代前半の信徒名簿を利用して、平戸小教区に移住した家族の社会的特徴を明らかにする。

#### 世帯主の誕生日・出身地

表 1 は平戸小教区の信徒世帯を農業・中心地区と産炭地区に区分して、世帯主の出生時期および出身地（受洗教会）を示したものである<sup>3)</sup>。

表1 世帯主の誕生時期と出身地

所在地	教会名あるいは教会の所属する地区	農業・中心地区					産炭地区					
		明治期	大正期	昭和(戦前)期	昭和(戦後)期	総計	明治期	大正期	昭和(戦前)期	昭和(戦後)期	未記入	総計
平戸市 (田平地区)	平戸口	1	1	3	6	11	2	0	0	0		2
	(南)田平	7	12	21	1	41	4	7	10	1	2	24
佐世保市江迎地区	潜竜	0	0	0	0	0	4	21	27	2	7	61
佐世保市(北松地区)・松浦市	西木場	0	0	1	1	2	0	1	0	1		2
	(下)神崎	0	2	5	1	8	2	5	7	0		14
	禰崎	0	0	1	0	1	1	1	0	0		2
平戸市 (平戸島・生月島)	(大)加勢	0	0	1	1	2	0	1	7	0		8
	上神崎	6	2	6	0	14	4	8	4	0		16
	平戸	1	2	2	0	5	2	1	0	0		3
	宝亀	0	1	2	0	3	3	2	3	0		8
	紐差	2	0	1	2	5	4	4	8	0		16
	中野・山野	0	0	2	0	2	1	2	2	0		5
	生月	0	0	0	0	0	0	1	0	0		1
佐世保市	佐世保(旧市)	2	0	2	0	4	1	3	3	3		10
	相浦・浅子	0	1	0	0	1	0	1	2	1		4
	佐世保市(合併地区)	0	0	0	0	0	1	0	0	0		1
長崎市	黒島	3	0	0	0	3	3	0	4	0		7
	出津	2	2	2	0	6	5	7	8	1		21
	黒崎	2	0	0	1	3	1	3	1	0		5
	外海地区(その他)	2	0	0	0	2	0	1	0	0		1
	長崎市(外海地区以外)	1	2	4	1	8	0	3	2	1	2	8
	高島・伊王島	0	0	0	0	0	0	1	1	0		2
大村市・諫早市	0	0	3	0	3	0	1	0	1		2	
五島地区	上五島	2	1	3	2	8	0	2	4	1		7
	下五島	1	0	0	0	1	0	0	1	0		1
長崎県外		0	1	1	0	2	0	1	3	0	1	5
判別不能		0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	4
未記入		13	6	6	24	49	10	14	10	3	35	72
総計		45	33	66	40	184	48	92	108	15	49	312

世帯主の出生時期を示せば、農業・中心地区は明治期 24.5%・大正期 17.9%・昭和(戦前)期 35.9%・昭和(戦後)期 21.7%、産炭地区は、出生年が未記入のものを除き集計したところ、明治期 18.3%・大正期 35.0%・

昭和(戦前)期 41.1%・昭和(戦後)期 5.7%で、両地区ともに昭和(戦前)期に出生した世帯主が多い。

農業・中心地区の場合、明治期に出生した世帯主がやや多いのは、明治期の開拓移住の第2・第3世代が農業地区に含まれるためと推測される。産炭地区の場合、大正期の出生が多いのは、昭和(戦前・戦後)期が炭鉱の興隆の時期であったこと、昭和(戦後)期の出生が少ないのは、閉山後の産炭地区に流入する世帯が激減したためと推測される。

世帯主の出身地を洗礼教会から推定すれば(未記入・判別不能をのぞき集計)、農業・中心地区は、平戸口教会と(南)田平教会(平戸小教区が独立するまでの所属教会)が4割を占め、信徒世帯の多くが田平地区への移住世帯の第2・第3世代だと確認できる。次に多いのが対岸の平戸島(約2割)、さらに長崎市(1割強)・北松地区(1割)の順である。一方、産炭地区は、潜竜教会が4分の1を占める。しかし潜竜教会の受洗者61人のうち幼

児洗礼は10名にすぎず成人洗礼者が8割以上を占める。そのため、実際の出身地は不明である。次に多いのが平戸島（2割）、さらに長崎市（とりわけ出津地区）（1割強）・北松地区（1割）の順である。つまり、農業・中心地区では、明治期以降に田平地区に移住した世帯の第2・第3世代、産炭地区では、非カトリック信徒であった成人洗礼者の比率が高く、それ以下の平戸島・長崎市（多くは外海地区）・北松地区の順は同様である。

こうした状況から、農業・中心地区の場合、明治期に移住した世帯の第2・第3世代を中心に近接する平戸地区・北松地区や長崎市外海地区から移住者が加わる形、産炭地区の場合、近接する平戸地区・北松地区や長崎市外海地区から移住した世帯を中心に成人洗礼者が加わる形で、コミュニティが形成されたと推測される。

### 家族状況

次に、信徒の家族状況を見ていきたい。表2は夫婦の受洗状況である。男性（夫）の受洗状況は幼児洗礼（農業・中心地区90.0%・産炭地区70.4%）、成人洗礼（7.5%・27.0%）、未洗者（2.5%・2.6%）で、農業・中心地区で幼児洗礼、産炭地区で成人洗礼者の比率が相対的に高い。一方、女性（妻）の

表2 夫婦の受洗区分

	世帯主(男性) *右は不明・女性世帯主を 除く比率	配偶者(女性) *下段は不明・配偶者無を除く配偶者の比率					総計	
		1幼児洗礼	2成人洗礼	3未洗者	4不明	5配偶者無		
農業・中心地区		92.5	7.5	0.0	-	-	-	
	1幼児洗礼	90.0	21	3	-	118	2	144
	2成人洗礼	7.5	12	-	-	-	-	12
	3未洗者	2.5	4	-	-	-	-	4
	4不明	-	-	-	-	23	-	23
	5女性の世帯主	-	-	-	-	1	-	1
	総計	100.0	37	3	-	142	2	184
産炭地区		89.4	9.9	0.7	-	-	-	
	1幼児洗礼	70.4	45	12	1	133	2	193
	2成人洗礼	27.0	72	1	-	1	-	74
	3未洗者	2.6	7	-	-	-	-	7
	4不明	-	2	1	-	33	1	37
	5女性の世帯主	-	1	-	-	-	-	1
	総計	100.0	127	14	1	167	3	312

受洗状況は、幼児洗礼（農業・中心地区92.5%・産炭地区89.4%）、成人洗礼（7.5%・9.9%）、未洗者（0%・0.7%）で、農業・中心地区で幼児洗礼、産炭地区で成人洗礼の比率が若干高いものの、両地区で大きな相違はない。

次に、世帯主の出生後の生活展開を見ていきたい。表3は農業・中心地区と産炭地区の信徒の結婚教会である。農業・中心地区の場合（未記入をのぞく）、平戸口教会が設立される前の所属教会であった（南）田平教会（小教区）と平戸口教会が多数を占めること、幼児洗礼が多いことを重ね合わせれば、多くの世帯主が田平地区（平戸口）で出生・婚姻する生活コースといえる。また幼児洗礼者の長崎市・平戸市（平戸島）・佐世保市等での婚姻が多いのは、新婦の所属する教会で挙式するカトリック信徒の慣行の影響や世帯主が出身地で世帯を形成した後に田平（平戸口）に移住したケースの双方と推測される。

一方、産炭地区の場合（未記入をのぞく）、潜竜教会と（下）神崎教会が結婚教会の3

表3 信徒の結婚教会

	農業・中心地区					総計	産炭地区					総計	
	1幼児 洗礼	2成人 洗礼	3未洗 者	4不明	5女性 の世 帯主		1幼児 洗礼	2成人 洗礼	3未洗 者	4不明	5女性 の世 帯主		
結婚 教会	平戸口	9 6	4 -	- -	- 7	- -	13	- 1	1 -	- -	- -	- -	1
	(南)田平	28 10	4 -	1 1	3 25	- -	36	12 4	2 2	1 -	1 10	- -	16
	潜竜	- -	- -	- -	- -	- -	-	26 28	26 5	- -	3 22	- -	55
	西木場	5 1	- -	- -	- 4	- -	5	2 2	- -	- -	- -	- -	2
	(下)神崎	5 3	1 -	1 -	- 4	- -	7	30 24	13 2	1 -	1 19	- -	45
	6禰崎	- -	- -	- -	- -	- -	-	3 2	- -	- -	- 1	- -	3
	(大)加勢	- -	- -	- -	- -	- -	-	2 1	1 1	- -	- 1	- -	3
	平戸市(平戸島)	8 3	1 -	- 1	- 5	0	9	4 1	- -	- -	- 3	- -	4
	佐世保市	7 1	- -	1 0	- 7	- -	8	10 5	1 1	- -	1 6	- -	12
	長崎市	5 2	- -	1 0	1 5	- -	7	5 1	- -	- -	- 4	- -	5
	大村市・諫早市	- -	- -	- -	- -	- -	-	2 1	- -	- -	- 1	- -	2
	上五島	2 -	- -	- -	- 2	- -	2	2 -	- -	- -	- 2	- -	2
	長崎県外	2 1	- -	- 1	- -	- -	2	1 -	- 1	- -	- -	- -	1
	未記入	73 10	2 -	- -	19 83	1 2	95	94 57	30 2	5 1	31 98	1 3	161
	総計	144 37	12 -	4 3	23 142	1 2	184	193 127	74 14	7 1	37 167	1 3	312

注:各項目の上段は世帯主(主として男性)、下段は配偶者(女性)の人数である。

分の2を占め、多くの世帯主が単身で産炭地に移住した後に家族を形成する傾向が明らかである。両教会の婚姻者の4割を成人洗礼者が占め、表示していないものの受洗教会を潜竜教会とする者が半数以上であることから、産炭地区に居住する信徒家族の一員と婚姻するために受洗したと推測される。潜竜教会・(下)神崎教会の次に多い(南)田平教会の場合、第二次世界大戦後まで潜竜地区が(南)田平教会の管轄であったことが理由であろう(百周年記念誌編集

委員会 1975: 28)。しかし教会設立前の潜竜地区では、信徒同士の結婚の比率が高かったことも推測される。

なお、男性信徒の結婚年齢(非該当・不明をのぞく)の比率は、10代(農業・中心地区4.2%・産炭地区3.7%)、20代前半(50.0%・34.7%)、20代後半(25.8%・38.4%)、30代前半(6.7%・12.3%)、30代後半(7.5%・4.1%)、40代以上(5.0%・6.9%)で、産炭地区の男性の結婚年齢が農業・中心地区の男性よりも高く、産炭地への移住後に家族を形成したことが裏づけられる。さらに家族規模を見たい。表4は、農業地区と産炭地区の家族規模の比率(不明をのぞく)で

表4 平戸口小教区の信徒家族の規模

	洗礼の状況		1人~4人	5人~8人	9人~12人	総計
	洗礼区分	比率				
農業・中心地区	1幼児洗礼	78.3	40.1	47.9	12.0	100.0
	2成人洗礼	6.5	75.0	25.0	0.0	100.0
	3未洗者	2.2	50.0	50.0	0.0	100.0
	4不明	12.5	50.0	40.9	9.1	100.0
	5女性の世帯主	0.5	100.0	0.0	0.0	100.0
	総計	100.0	44.2	45.3	10.5	100.0
産炭地区	1幼児洗礼	61.9	37.0	50.0	13.0	100.0
	2成人洗礼	23.7	64.4	35.6	0.0	100.0
	3未洗者	2.2	42.9	57.1	0.0	100.0
	4不明	11.9	62.2	32.4	5.4	100.0
	5女性の世帯主	0.3	100.0	0.0	0.0	100.0
	総計	100.0	46.8	44.5	8.7	100.0

注:家族員数が不明をのぞいた比率である。

ある。農業・中心地区の場合、夫が幼児洗礼の世帯（8割弱）で、5人～8人が5割弱、9人～12人が1割強で5人以上の規模の家族が5分の3に及ぶ。対照的に、夫が成人洗礼の世帯（1割未満）では1人～4人が4分の3に達する。産炭地区の場合も、夫が幼児洗礼の世帯（約6割）で5人～8人が5割、9人～12人が1割強で5人以上の規模の家族が5分の3に及び、対照的に夫が成人洗礼の世帯（約4分の1）では1人～4人が約3分の2に達する。このように家族規模に関して、農業・中心地区と産炭地区という地域区分以上に、夫の洗礼区分、すなわち夫が幼児洗礼の家族と夫が成人洗礼の家族の間で家族規模が異なる傾向が明確である<sup>4)</sup>。

#### 4 平戸小教区の信徒世帯の移動状況

次に、現在の平戸小教区に移住してきた世帯の移動状況と他出世帯の状況を見ていきたい。

##### 移住状況①—田平地区（平戸口）に移住するまで

まず、農業・中心地区および産炭地区の信徒世帯の移動の一端を明らかにしたい。表5は、世帯主の受

洗教会と結婚教会・子どもの受洗教会（子どもの間で受洗教会が異なる場合は複数掲載）および平戸小教区からの他出先の記載のある世帯数である。この表の世帯主の受洗教会から出身地、子どもの受洗教会から平戸小教区に居住するまでの世帯の移住地が推定できる。表6および次項の表7は、表5から主要な出身地区を

表5 世帯主の受洗教会と子どもの受洗教会

地区	教会	農業・中心地区					産炭地区					
		平戸小教区に移住前				平戸小教区からの他出先	平戸小教区に移住前				平戸小教区からの他出先	
		世帯主の受洗教会	子どもの受洗教会1	子どもの受洗教会2	子どもの受洗教会3		世帯主の受洗教会	子どもの受洗教会1	子どもの受洗教会2	子どもの受洗教会3		
田平地区	平戸口 (南)田平	11 41	19 18	11 1	1		2 24	4 7		1 1		3
潜竜地区	潜竜						61	89	30	6		
北松地区	西木場	2	2	2		1	2	5				
	(下)神崎	8	1			1	14	8	2		1	
	禰崎	1			1		2				1	
	(大)加勢	2		1			8	15	9	1	7	
平戸島	江迎・御厨							1	1		2	
	上神崎	14	2		1		16	4			1	
	平戸	5	2			2	3		1			
	宝亀	3					8	1	1		1	
	紐差	5	2				16	1			1	
	中野・山野	2					5	1				
佐世保市	生月						1	1				
	佐世保(旧市)	4	1		1	2	8	5	4		4	
	俵町						2	1			1	
	相浦・浅子	1	2	1		6	4	10	3		7	
	佐世保市(合併地区)					1	1	1	1		7	
長崎市	黒島	3		1			7	3				
	出津	6					21	1	2		2	
	黒崎	3					5					
	外海地区(その他)	2				2	1	3				
	長崎市	8	6	1	1	2	8	1		1	4	
	高島・伊王島						2	1	2		5	
大村市・諫早市	3		1			2	2			2		
五島地区	上五島	8					7					
	下五島	1					1	1			1	
長崎県外		2	3	1	1	18	5	5	1		52	
合計		135	58	20	6	39	236	170	58	11	102	
判別不能							4	1				
総計		135	58	20	6	39	240	171	58	11	102	

注：潜竜は別小教区時代の記録では他出となる。



抽出し結婚教会および長崎県外の他出地域を加えたものである。

農業・中心地区の場合、田平地区で誕生した世帯主が4割弱を占めること、子供の受洗

表6 農業・中心地区の信徒の移動状況

世帯主の受洗教会	結婚教会		子の受洗教会		田平（平戸口教会管轄）地区居住	他出先	
田平地区 52	田平地区	29	田平地区	18		田平地区	3 (南)田平
	平戸島	4	田平-黒島	1		佐世保市	2
	北松地区	3	田平-県外-長崎	1		長崎市	1
	県外	2	平戸島	1		県外	7 九州1・近畿3・中部2・ブラジル1
	不明	14	不明	31		平戸島	1
平戸島 29	田平地区	7	田平地区	5		佐世保市	1
	平戸島	2	北松-田平	2		県外	1 東北1
	北松地区	2	佐世保地区	2			
	佐世保市	2	田平-県外	1			
	不明	16	長崎-北松-田平	1		県外	2 中部1・北海道1
長崎市 19	不明	13	不明	18			
	長崎市	3	田平地区	1			
	北松地区	2	長崎市	2			
	平戸島	1	長崎-北松	1			
	不明	13	不明	9		佐世保市	1
北松地区 13	佐世保市	3	田平地区	2	長崎市	1	
	田平地区	2	佐世保市	1	県外	2 近畿1・ブラジル1	
	平戸島	1	平戸島	1			
	北松地区	1					
	長崎市	1					
五島地区 9	不明	5	不明	9	佐世保市	2	
	田平地区	4	田平地区	1			
	長崎市	1	田平-長崎	1			
	佐世保市	1					
	不明	3	不明	7			

注：他出先は離家離村を除く。また少数の地区は掲載していない。

教会（判明分）の大半が田平地区の教会であることから、親世代以前に移住してきた世帯に生まれて田平地区で家族を形成した世帯が中心の信徒世帯といえる。ちなみに田平地区での婚姻が多いことから、配偶者も田平地区出身者の可能性が高い。

世帯主が平戸島で誕生した世帯（2

割強）には、田平地区で家族を形成した世帯および他地域で家族を形成した後に田平地区に移動した世帯が見られる。しかし、平戸島で家族を形成した後に移動した世帯は少ない。世帯主が現在の長崎市で誕生した世帯（1割強）は、長崎市内で家族を形成した後に田平地区に移住した世帯が多い。世帯主が北松地区（1割）や五島地区で誕生した世帯は、出身地区以外の田平地区等で家族を形成している。

#### 移住状況②—産炭地区に移住するまで

次に、表7で産炭地区に居住した信徒の移動の一端を見ていきたい。4分の1の世帯主が潜竜教会で受洗している。潜竜教会の設立前の所属教会の（南）田平教会の世帯主を加えれば、4割弱の世帯主が潜竜地区にいる時に受洗したと推測される。しかし潜竜地区の受洗者の8割以上、潜竜地区・田平地区の受洗者の3分の2を占める成人洗礼者の出身地は不明である。大半は単身で潜竜地区に移住し、潜竜地区で家族を形成している。子どもの受洗教会を辿ると、北松地区・佐世保地区（おそらくは産炭地）で家族を形成した後に潜竜地区に移住してきた家族が一定数存在したと推定できる。

一方、世帯主が平戸島出身の世帯（2割）は、その9割以上が幼児洗礼である。子どもの受洗教会から見て、平戸島で家族を形成したのは1割程度にすぎず、大半の世帯主が移動先で家族を形成したと推測される。家族の形成は潜竜地区が最も多く4割を占めるものの、北松地区・佐世保市・長崎市で家族を形成した後に潜竜地区に移住した世帯も4割程度見られる。世帯主が現在の長崎市出身の世帯（1割強）も9割弱の世帯主が幼児洗礼で、多く

表7 産炭地区の信徒の移動状況

世帯主の受洗教会	結婚教会	子の受洗教会	他出先
田平地区 27	田平地区 5	田平地区 10	佐世保市 2
	潜竜地区 5	北松地区 2	田平地区 1 (南)田平
	北松地区 4	北松-潜竜 2	長崎市 1
		平戸-田平-潜竜 2	県外 5 九州1・近畿1・中部1・北海道2
		潜竜-北松 1	
		佐世保市 1	
		五島-潜竜 1	
	県外-潜竜 1		
不明 13	不明 7		
潜竜地区 61	潜竜地区 27	潜竜 18	北松地区 1
	北松地区 11	田平-潜竜 1	佐世保市 1
	田平地区 1	北松-潜竜 1	長崎市 1
	平戸島 1	県外-潜竜 1	五島地区 1
	不明 21	不明 40	県外 12 九州4・中国四国2・近畿4・北海道2
平戸島 49	北松地区 10	潜竜地区 11	佐世保市 5
	潜竜地区 6	北松地区 3	平戸島 2
	田平地区 2	北松-潜竜 3	長崎 2 高島・伊王島1
	平戸島 2	佐世保市 2	北松地区 2
	長崎市(高島) 1	平戸-北松 2	大村・諫早 1
	大村・諫早 1	田平-潜竜 1	県外 13 九州1・近畿5・中部4・関東1・北海道2
		北松-佐世保-田平 1	
		北松-佐世保-潜竜 1	
		平戸-潜竜 1	
		平戸島 1	
		佐世保-北松 1	
		長崎市-潜竜 1	
		長崎(高)-平戸-潜竜 1	
	大村-平戸-潜竜 1		
不明 27	不明 19		
長崎市 36	北松地区 8	潜竜地区 13	北松地区 2
	潜竜地区 5	潜竜-長崎-田平 1	長崎市 2 高島・伊王島1
	佐世保市 4	長崎 1	田平地区 1
	田平地区 3	長崎-潜竜 1	佐世保市 1
	長崎市 1	北松地区 1	大村・諫早 1
		北松-潜竜 1	県外 7 近畿3・中部3・関東1
	不明 15	不明 18	
北松地区 26	北松地区 12	北松地区 4	佐世保市 2
	潜竜地区 3	潜竜地区 4	北松地区 2
	田平地区 1	佐世保市 2	長崎市 1 高島・伊王島1
	佐世保市 1	田平地区 1	県外 4 九州1・中四国1・近畿1・ブラジル1
	県外 1	平戸島-潜竜 1	
		佐世保-潜竜 1	
		長崎-北松-潜竜 1	
不明 8	不明 11		
佐世保市 22	佐世保市 6	佐世保市 5	佐世保市 4
	潜竜地区 4	潜竜地区 3	長崎市 2 高島伊王島1・池島1
	田平地区 3	田平地区 1	県外 3 近畿2・北海道1
	五島地区 1	田平-潜竜 1	
	不明 8	不明 11	
五島地区 8	五島地区 1	北松-潜竜 2	長崎市 2 高島・伊王島1
	佐世保市 1	潜竜地区 1	県外 2 中四国1・関東1
	田平地区 1	佐世保市 1	
	北松地区 1		
	長崎市(高島) 1		
不明 3	不明 4		
県外 5	潜竜地区 1	潜竜地区 2	佐世保市 1
	北松地区 1	北松-潜竜-江迎 1	県外 1 九州1
	佐世保市 1	佐世保市 1	
	不明 2		

田平(平戸小教会管轄)地区居住

注: 他出先は離家離村を除く

半々である。世帯主が五島地区・県外出身の世帯はすべてが幼児洗礼で、単身で出身地から他出した後に潜竜地区あるいは北松地区で家族を形成している。

移住状況③—平戸小教区からの他出先

の世帯主は潜竜地区、一部北松地区で家族を形成している。しかし出身地の長崎市で家族を形成した後に移動した世帯はわずかである。世帯主が北松地区の出身世帯(約1割)は、幼児洗礼の世帯主が3分の2、成人洗礼の世帯主が3分の1で、成人洗礼の比率が他地区の出身者を上回る。子どもの受洗教会から見て、単身で出身地から他出した後に潜竜地区および北松地区(多くの世帯主が成人洗礼)で家族を形成したと推測される。世帯主が佐世保地区の出身世帯(1割弱)は9割弱が幼児洗礼で、出身地で家族を形成した後に潜竜地区に移動した世帯と潜竜地区で家族を形成した世帯が

さらに、平戸口小教区からの世帯単位の他出状況を見ていきたい。信徒台帳に他出先（教会あるいは市町村名）が記載された世帯は、農業・中心地区 21.2%・産炭地区 32.7%で、農業・中心地区も他出世帯の割合が高い。しかし産炭地の割合はさらに上回り、信徒世帯の約3分の1に及ぶ。

信徒世帯の挙家による他出先は、農業・中心地区および産炭地区ともに上位の3地区が一致する。長崎県外への他出（農業・中心地区 46.2%・産炭地区 51%）が圧倒的に多く、次に佐世保市（23.1%・18.6%）、長崎市（10.3%・10.8%）の順である。しかしその次は農業・中心地区の場合、田平地区が長崎市と同率、さらに北松地区・平戸地区（5.1%）の順であるのに対して、産炭地区の場合、北松地区が長崎市と同率、さらに田平地区・平戸島（2.9%）、大村市・諫早市（2.0%）、五島地区（1.0%）の順である。

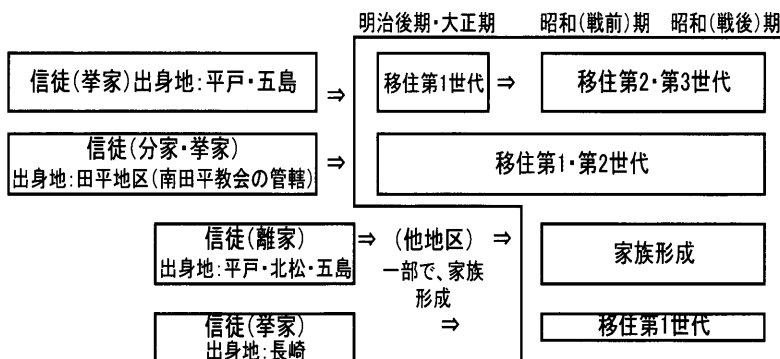
他出先の約半分を占める長崎県外の移動先は、農業・中心地区および産炭地区ともに半数以上が近畿地方・中部地方である。相違するのは下位で、農業・中心地区で九州地区・ブラジルが続くのに対して、産炭地区で北海道・中四国が続く。

さらに表6の世帯主の出身地区別に他出先を見れば、農業・中心地区の他出世帯のうち世帯主が田平地区の出身世帯の場合、他出先として県外および地元・近接地区の田平地区（南田平教会）・佐世保市が多い。次に世帯主が平戸島・北松地区・五島地区の出身世帯の場合、佐世保市等の近接地区が目立つ。一方、世帯主が長崎市出身の世帯の場合、他出先は長崎県外である。次に表7で産炭地区の状況を見れば、世帯主がいずれの地区の出身の場合も、長崎県外への他出が最も多い。中でも世帯主が潜竜地区で受洗した世帯の場合、県外への他出の割合が高い。一方、世帯主が北松地区・佐世保市の出身世帯の場合は近接地区への他出の割合がとりわけ増す。

信徒台帳に掲載された他出の移動の大半は1960年代までのもので、国のエネルギー政策の転換に伴う炭鉱の閉山や高度経済成長の影響が跡づけられる。農業・中心地区でも信徒世帯の他出の割合から、農業・中心地区でも他出が常態化している状況がうかがえる。

## 5 家族と移動の社会的特徴と宗教共同体の形成

図2 農業・中心地区(平戸口教会管轄)の移動と家族形成

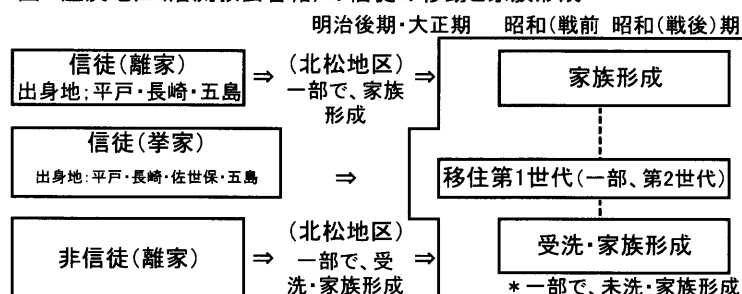


平戸口小教区を事例にして、農業地区・中心地区および旧産炭地における各教会の設立と1900年代～1960年代の信徒の世帯・移動の状況を明らかにした。最後に、本論の目的に即してこうした状況の整理と検討を行いたい。

まず、第1の目的の信徒

の世帯・移動に関して、図2の整理のように、田平地区（平戸口）が第3次移住地の田平地区（田平）移住の周辺地・後発地に位置づけられ、明治後期以来の移住世帯の第2・第3世代や田平地区（田平）への移住世帯の分家が基層であることが判明した。この地への移住の広がりには、半島地区に新たな開拓地が用意されたことや小作地が多かったことによる。こうした基層の世帯に加えて、平戸地区・北松地区等から単身者の来住が見られ、中心地区等で家族を形成する。

図3 産炭地区(潜流教会管轄)の信徒の移動と家族形成



次に、産炭地区の場合、図3の整理のように、早期（大正期）の来住の世帯は、平戸島・長崎市・五島地区からの挙家の信徒世帯である。しかし大正期・昭和（戦前）期になると、単身者（信徒・非信徒）の来住が相当

数に及ぶ。単身の来住者のうち平戸島・長崎市・佐世保市・五島地区出身の信徒の場合、産炭地に移住後に出身地や産炭地の信徒世帯の一員等と家族を形成する。非信徒の場合、婚姻の条件として潜竜・北松等の産炭地での受洗を経て、産炭地の信徒世帯の一員と家族を形成する。

一方、1960年代になると、平戸口小教区から他出が激増する。農業・中心地区および産炭地区ともに長崎県外、とりわけ近畿地方・中部地方等の工業地域と長崎県内の都市部（ともに工業都市の様相をもつ近隣の佐世保市と県庁所在地の長崎市）への他出が顕著である。地区別では、農業・中心地区の場合、近接地区と農業志向（ブラジルへの開拓移住）の存続、産炭地区の場合、長崎県内や北海道に残存する産炭地への移動（いわゆる「ヤマからヤマ」への移動）が特徴である。

第2の目的の信徒世帯の宗教生活に関して、農業地区（および中心地区）と産炭地区に移住した信徒は、農業地区の田平小教区に所属して宗教生活を継続する。第二次世界大戦後の教会設立前、農業地区の場合、草分けの移住からしばらく後に集落教会（永久保教会・岳崎教会）、産炭地区の場合、急激な信徒数の増加を背景に数年のうちに炭鉱住宅に民家御堂（炭鉱教会）が設立される。こうした集落教会や民家御堂の設立の背景には、田平教会との地理的距離が想定される。しかし同様に地理的距離のある江迎地区に集落教会が設立されていない。江迎地区が明治期から田平地区（田平）と深い関係にあったのに対して、永久保集落は平戸出身世帯、岳崎集落は五島出身世帯、潜竜地区は炭鉱労働者世帯という明確な信徒属性（出身地・職業の差異）が発動し、独自施設の設立が促進されたと見ることができよう<sup>5)</sup>。

第二次世界大戦後、農業・中心地区では、平戸口社会館のミサを経て平戸口教会、産炭地区では、急激な信徒増を背景に潜竜教会が設立され、さらに遅れて江迎地区に江迎教会

が設立される。こうした信仰の制度化は、農業・中心地区と産炭地区で集落教会・民家御堂の設立までの年数は異なるものの、ともに田平小教区の周辺地区における同様の展開の一つに位置づけることができる。

その一方、信徒世帯の状況は、かなりの相違が見られる。第一は、信徒世帯の受洗状況に関して、農業・中心地区の場合、ほとんどの信徒が幼児洗礼で意図的コミュニティの出身であるのに対して、産炭地区では、婚姻の条件として夫あるいは妻が入信（成人洗礼）する割合が高い点である。第二は、両地区間ではなく世帯主の洗礼区分で家族規模が異なる点である。農業世帯と炭鉱労働者世帯という職業の影響や炭鉱住宅という居住環境の影響は否定できないものの、幼児洗礼の世帯が成人洗礼の世帯の規模をかなり上回ることは、入信の経緯や教会法（自然出産）の遵守との関連が想像されよう。

第3の目的の一つの産炭地区への移動に関して、初期には産炭地でも一定数の挙家の移住が存在し、その後に信徒の移住が単身に転じた点、多数の非信徒の入信が見られる点で、産炭地への移住は、第3次移住と大きく異なるものである。大正・昭和期の第4次移住（例えば、福岡県行橋市新田原・宮崎県宮崎市田野）が第3次移住に連続するのに対して、産炭地区への移動は、その後の都市への移動、とりわけ高度経済成長期以後の離家離村の単身移動の先駆けを思わせるものである。

さらに、産炭地における信徒増を都市地域の宣教活動による信徒増と同じと見れば、宗教コミュニティの類型化において産炭地区の宗教コミュニティは都市の③信仰コミュニティの様相を帯びるものに位置づけられるかもしれない。

表8 宗教共同体の成員

入信区分	夫婦二人信者	一人信者							
		夫	妻	幼児	成人	幼児	成人	非信者	非信者
意図的コミュニティ	◎大半	○増加	△少数	×	△少数	△少数	×	×	×
産炭地のコミュニティ	○コア	○	○	×	△	△	×	×	×
信仰コミュニティ	○コア	○	○	○	○	○	○	○	○
(経年化した)意図的コミュニティ	◎	○増加	○	×	△	△	×	×	×

しかし、表8においてコミュニティの成員性を比較すれば、産炭地も基層である成員が意図的コミュニティ等の出身世帯である点で他の類型と共通する一方、都市と産炭地のコミュニティに付加される信徒層に関して、都市が個人の信仰に基づく信徒層であるのに対して、産炭地は基層となる家族（「イエ」）の一員に加わる目的で入信する信徒層という相違が明らかである。

すなわち、産炭地における信徒の急増は、産炭地区における男女比率の不均衡に由来し、イエを基盤にする信仰の展開という点で、都市における信仰コミュニティと性格が異なる。成員性では、どちらかといえば④（経年化した）意図的コミュニティの成員性に類似するともいえる。

しかし、イエの信仰の存続と同業関係の存在という点で、独自の②（非農業型）意図的コミュニティに位置づけるのが妥当といえよう。

なお、本稿が平成24年度～27年度科学研究費助成事業による研究（研究代表者 叶堂隆三「移動と定住における類縁関係の発動と制度化に関する研究」課題番号 24530641）の成果の一部であることを付記しておく。

#### [注]

- 1) 2015年5月および8月～11月の各月、平戸口教会主任司祭の鍋内正志神父に聞き取り調査を実施した。なお平戸口教会における資料収集に関して、山口大学横田尚俊氏の協力を得た。
- 2) 以後、平戸口教会の管轄を田平地区（平戸口）、田平教会の現在の管轄を田平地区（田平）と記載する。なお田平町は、平戸市との合併前の旧田平町全体を指す。
- 3) 産炭地区に分類した世帯は、世帯主・子ども世代の受洗教会や結婚教会が潜竜等の産炭地区である世帯、記載事項に炭坑名や吉井町等の産炭地名が記されている世帯である。それ以外の世帯を便宜的に農業・中心地区に分類したため、農業・中心地区には中小の産炭地を管轄する教会に所属経験のある世帯や田平地区山内免等の非農業世帯が含まれている。
- 4) 農業地区と産炭地区の夫が幼児洗礼の世帯の傾向が類似しているために、親世代の同居の有無の影響は小さいと見ることができよう。
- 5) 田平地区（平戸口）の場合、平戸口教会の管轄に居住する世帯のうち田平教会の信徒世帯の分家と見られる世帯等は、田平教会に所属する傾向が見られる。

#### [文献]

- 江迎町教育委員会，1968，『江迎町郷土史』江迎町長役場。
- 江迎町郷土誌編纂委員会，2000，『江迎町郷土誌』江迎町教育委員会。
- 浜崎勇，1975，『瀬戸の十字架——田平のキリシタン百年の歩み』（私家版）
- 長谷功，2002，『平戸口教会史カトリック』平戸口教会。
- 百周年記念誌編集委員会，1975，『永遠の潮騒——田平カトリック教会創設100周年』田平カトリック教会。
- 叶堂隆三，2014a，『行橋市新田原と上五島青方への移住とコミュニティ形成——長崎市外海地区からの第4次移住地の状況』関市立大学論集 149。
- ，2014b，『長崎のカトリック信徒の移住と宗教コミュニティの形成——家族戦略から生成された地域戦略と外国人神父の宣教戦略』下関市立大学論集 148。
- 北松浦郡江迎村郷土誌，1928年。
- 吉井町郷土誌編纂委員会，1966，『吉井町郷土誌』吉井町教育委員会。

所属：下関市立大学

E-mail アドレス：Kanado123@san.bbiq.jp